

みち しるべ

道絆



— 絆は道を切り拓く —

第44代 豊昭学園生徒会

仙台遠征活動

活動内容報告レポート

◦ 目的

- ・ 豊昭祭の売上金を生かすため。
- ・ 東日本大震災で被災された方の支援をするため。
- ・ 被災地の視察をして、自然災害の驚異を感じるため。

◦ 活動日

- ・ 10月15日 土曜日 ~ 10月16日 日曜日

◦ 活動参加者

第44代 豊昭学園生徒会役員	13名
会長	生方 勇士
副会長	田中 晴菜
書記	菊地 功貴
	小林 美雪
	田中 佑佳
会計	堀内 陸
	落合 佳紀
執行委員	金子 友哉
	久保田 映子
	榮田 翔平
	大崎 俊介
	森田 嵩叶
	矢野 匠

引率

村田 茂 先生

○ 仙台市・名取市 被害の様子

→ 仙台市街

- ・ あまり被害が感じられず、地震の爪痕とも見られなかった。
- ・ 宮城県は地震が多く起こされたが、防災都市として作られているのが、関わっているのと考えた。

→ 仙台市 太平洋沿岸

- ・ 砂防林の木々がなぎ倒されているを見て、波が堤防を越えているのが分かった。
- ・ 海から数10m、数100m 離れているところにあった建物も、壁が破壊されていたり、1階部分がスッパリ取られていたり、波の威力がとても強かった事が分かった。

→ 名取市 開上

- ・ 津波が襲ったせいか、町の中でがさがと海水の臭いがした。
- ・ とくに被害が大きく町自体が消えてしまった。

○ 被害を見て思った事

今回の東日本大震災は、地震から人へという直接的なものより、地震によって津波が発生し、その津波による被害の方が多いう事を感じられた。

被害が多い...。被害が大きい...。と感じたのは、やはり名取市の開上を見学した時だった。もともと、港町で栄えていたが、海に開かれていて、町の中に港があまう箇所だった。だが、港のすぐ横には、地震によって流されたゴミ、生活用品が山の様に積んであり、今では港としての機能を果たさないだろうと思った。

この町の原状を見て、復興にどのくらいかかるだろうかと考えたが、少なくとも数10年はやはりだろうと思った。自分から予想していた被害の予想より、実際の被害の方があまりにも大きく、最初見た時は絶句した。

・私達には何ができるのか

→ 日々の備え

・ 3/11の日、生徒会役員は学校で被災しました。東京でも大きなゆれを感じ、交通機関がマヒしたため、学校が一夜を明かしました。もし、東京直下で大きな地震が起これたら...と考えると、日々、地震に対する備えをしておかないと大変な事になると考えた。

→ 被災地の支援

・ 私達が目当たりとした被災地の状況を見ると、被災地の支援を全国的に活発化しなければならぬと思った。

・ 直接的な支援でなくても、被災地の物を消費することで支援につながると思った。

『私達は小さな事も出来る事をする。出来る範囲で被災地の支援を続けたい。』
これが今回の遠征で考えた結果である。



<感想>

豊昭学園生徒会の私たちは、10月15日、16日と宮城県
仙台市へ義援金を届けるに行ってきました。

正直出発して現地につくまでは不安だらけでした。

3月11日 マグニチュード9の地震が東北を襲い
海岸付近は津波で全てのものが流された姿を
テレビなどで見ている私は、現地がどこまで復興しているか
どんな姿になっているのか、予想できませんでした。

しかし仙台市内に到着するとかなり復興されていて、
震災ほどなかったかのような風景になっていて驚きました。
市庁で義援金を渡したときは、これで少しでも今までの
宮城県に近づけるといいなと思っていました。

次の日被災地視察ということで被害の大きかった名取市へ
行ったときに私は一瞬言葉を失うほどの衝撃を受けました。

海岸付近の家はほぼなく、木なども倒れていたりして
震災前に人が住んでいたとは思えないほど
寂しくなっていました。

そこに住んでいた人の姿はもちろんなく、声も全く聞こえませんでした。
防波堤から見た海は、すぐそばにあったわけじゃ
なかったのに、こんなに被害が大きいのという事は、
どれだけの勢いのある大きな津波が襲ってきたかと
考えると身震いするほどでした。

復興されているといってもカレキが集められているだけで
人が住めるようになるまでにはまだまだ時間がかかるように
感じられました。

今わたしたちが東北大震災の被災地のために
何が出来るか……。

どんな小さな力でも私たちが出来ることはいくらでも
どんなに小さなことでも被災地が早く今までのように
人の暖かさを感じることができ笑顔あふれる場所になり
地元の人々が戻ってくるように、日常生活を安心して送れる
ように復興するためにできることから少しずつできると
いいなと思います。

来年の豊昭祭の売上も東北へ持っていきたいな
と思っています。

私にとってもいい体験ができた
2日間だったと思います。





豊昭学園生徒会は10月15、16日の2日間を使って
宮城県仙台市へ義援金を届けに行ってきました。

津波の影響で家屋は流され、
土台だけの姿になっていたと
震災前に人が住んでいたとは思えないほど
無惨な姿になっていました。

この写真は現地の様子です。

私たちに出来ることは少ないかもしれませんが
この風景を心に刻み、
早く震災前の元気な笑顔あふれる日本になるように
日本を盛り上げていけたらいいと思います。





後記にかえて

生徒部 生徒会顧問 村田 茂

本年度の豊昭際は、弁論大会・演劇部・合唱部・剣道招待試合・保護者コーラス隊など新規参入の団体が多数あり、例年の参加団体と相まって益々文化の香り漂うものとなった。

3月11日の痛ましい震災を受け、「エコ」を一つのテーマとして節電などの制限の中、生徒の皆さんは素晴らしい学園祭を作りあげてくれた。

終了後、どこからともなく豊昭際の売上金を被災地への義援金にしようという声が高まり、生徒会も全会一致で決定した。

豊島区役所で東北地方の防災協定地域をお聞きし、宮城県庁へ連絡。生徒会役員の「全校生徒が頑張った豊昭際の売上は自らの手で渡したい」との熱い気持ちにほだされ？顧問もそれに応じた。

学校の手続きを終了後、一路東北道を北へ。

幸いにも土曜日で県庁がお休みにもかかわらず福祉課長が出迎えてくれ、簡単なセレモニーと共に義援金を手渡すことができた。大変感謝されたことは言うまでもない。

もちろん参加生徒は、目的達成に満足気であった。

さて、ここは仙台。そうだ、今宵は牛タン屋だ・・・満喫！

翌日は県庁の方に紹介され、甚大な被害を受けた名取市閑上地区の視察。

眼前に広がる荒野には、ここにかつて人の営みがあったのかと疑わせるほどの景観であった。文字通り「夢のあと」と化していた。生徒達も絶句状態で万感胸に迫る想いであったに違いない。震災直後のTV映像も凄まじいものがあった、何もなくて静かになった被災地であっても迫り来るものをハダで感じる事が出来た。

一日も早い復興を願わずにはられない。

「哀しみは 身より離れず 人の世の 愛あるところ 添ひて潜める」 久保田空穂

過ぎゆく時を忘れ、被災地に立ちすくみながら、何度も何度もこの歌が頭をよぎった。

これを機に生徒たちも大きく成長したに違いない。人の痛みをわかる人になってくれたに違いない。それを後代の多くの方々に伝え感じていただきたく、この小冊子を編んだ。

12月の青空の下、

「がんばろう日本、がんばろう東北、がんばろう豊昭、

そしてがんばろう子どもたち！！」